

弓、天之加久矢射、殺其雉、爾其矢自雉智通而逆射上、逮坐天安河之河原、天照大御神、高木神之御所、是高木神者、高御產巢日神之別名、故高木神、取其矢見者、血著其矢羽、於是高木神告之、此矢者、所賜天若日子之矢、卽示諸神等、詔者、或天若日子不誤命、爲射惡神之矢之至者、不中天若日子、或有邪心者、天若日子於是矢麻賀禮、此三字以音云而取其矢、自其矢穴、衝返下者、中天若日子、寢胡床、本作朝床、一之高曾坂以死、

〔古事記傳〕十三矢穴は、下國より天上へ射徹たる孔なり、古傳の趣をえまらず、かたき人ば、此矢穴を疑ひて、下國と天上との隔に、板などの如き物あるが如く、又天の眞名井も如く、聞えて、陋しとや思ふらむ、上の御警段に、堅庭者於、向股、蹈那豆美と云ひ、又天之眞名井も如く、又畔離溝埋など、皆天上のこのと名れば、矢の通り來たる穴も、無くばあるべからず、若此穴を陋しとせば、かの堅庭も眞名井と畔も溝も、みな陋しからすや、されば延佳が當作、天空と云る、天空こそな、かの堅庭も眞名井といがで、又師岡部眞淵も、此穴をいかにとや思はれけむ、強て矢之美知と訓れき、道ならむには、ほかに、穴といは書む、さばかり古の意をよく見明らかめて、万世までの師と仰ぐべき人すら、なほ、よく難きわざになむ、

〔日本書紀〕神代伊弉諾尊伊弉冉尊、立於天浮橋之上、其計曰、略下

〔釋日本紀〕五丹後國風土記曰、與謝郡郡家東北隅方、有速石里、此里之海有長大石、前長二千二百廿九丈、廣或所九丈、以下或所十丈以上廿丈以下、先名天梯立、後名久志濱、然云者、國生大神伊射奈藝命、天爲通行、而梯作立、故云天梯立、神御寢坐間、伏仍怪、久志備坐、故云久志備濱、此中間云、久志、自此東海云、與謝海、西海云、阿蘇海、是二面海、雜魚具善住、但蛤乏、少播磨國風土記曰、賀古郡益氣里有石橋、傳云、上古之時、此橋至天、八十人衆、上下往來、故曰八十橋、案之、天浮橋者、天橋立是也、

〔古事記〕上故爾詔天津日子、番能邇邇藝命、而離天之石位、押分天之八重多那、此二字以音雲而、伊都能知和岐知和岐氏、自伊以下於天浮橋、宇岐士摩理蘇理多多斯氏、自宇以下天降坐于竺紫日向之高千穗之、自久以下久士布流多氣、自六以下六字、以音